『今昔物語集』巻十の構造

―王名未詳譚を視座として―

宮田　尚

1

『今昔物語集』巻十の現行形態は、編集作業がすすむなかで原案の一部が手なおしされ、再構築されたものであった。そのことは本誌前号(注1)でふれたように、鈴鹿本巻十の目録標題と本文標題とのあいだにみとめられ差異からあきらかである。

手なおしの跡がみとめられる個所と、その概要とはつぎのとおり。

(1)第一話＝「秦始皇時従天竺渡利房等語」から「秦始皇在感楊宮政世語」への変更。
(2)第四話＝「漢武帝以張騫令見天河水上語」の挿入。
(3)第八話＝「震旦呉招孝見流詩恋其主語」の挿入。
(4)第一三話＝削除
(5)第一四話＝削除
(6)第二九話＝「国王服乳成瞋擬殺医師語」から「震旦国王愚斬玉造手語」への変更。
(7)第三十話＝「国王前阿竭陀薬来語」から「漢武帝蘇武遣胡塞語」への変更。

(2)～(5)は、おそらく連動する現象であろう。(1)・(6)・(7)のように新旧のはなしが確認できるわけでないから断定はさしひかえねばならないが、なんらかの不都合があってまず第一三・一四の両話が削除され、その位置で両話とさしかえるにふさわしいはなしがさぐりあてられないままに、やむなく第四話と第八話とに分散して二話をおぎない、員数の上でのつじつまあわせをしたもののようにみえる。

もっとも、二話一類の説話配列の整備状況からすると、現行の形態の方が整っている。したがって手順は逆で、はじめに第四話と第八話とが挿入され、そのあおりで第一三・一四の両話がはみ出したのだとする解釈も、可能性としては、ありえないことではないとしなければなるまい。ただしこのばあい、削除の理由になっとくのいく説明はつけにくいけれど。

第一話と、第二九・三十話とのさしかえの理由は、はっきりしている。前者は、より適切な新資料の発見によるものであり、後者は、企画の段階で見過されていた不都合の発見を契機とするもので

ある。

いま少し具体的に述べよう。

第一話に関していえば、巻六と巻十との巻頭には、もともと始皇譚を配そうとの基本方針を『今昔物語集』はもっていた。ところが、満足のいく資料は得られない。とりわけ巻六にふさわしい始皇譚がない。しかるべき資料の求められないままに、とりあえず、始皇が仏教の渡来を拒否したという、いわゆる利房譚を巻十の巻頭にすえた。その後、編集がすすむなかで、始皇の政治的側面をとりあげた咸陽宮譚がさぐりあてられた。利房譚よりもこの方が、第二話以下とのかねあいからも、巻頭をかざるにふさわしい。そこで利房譚を巻六にまわし、新資料としての咸陽宮譚を巻十の巻頭にすえなおした。

利房譚から咸陽宮譚への移行のしだいを、若干の推測をまじえていえばこういうことになるだろう。

第二九話に関していえば、「国王服乳成瞋擬殺医師語」を巻十に収めようとしたこと自体、すでに間違っていた。ほかでもない。これは天竺の国王についてのはなしだからである。天竺種のはなしがどのようないきさつで震旦部にまぎれこんだのか、その間の事情はつまびらかでない。しかしともあれ、これは排除されるべくして排除されたのであった。

第三十話には、震旦部に位置することの不適格な条件はない。これはどうやら、医薬を材とする点において一類をなす第二九話とのからみで、それと連動して排除されたもののようである。

いったん巻十に配されることがきめられながら、そこから削除された第一話の利房譚は、いまいうように巻六に移籍された。同じように第二九・三十の両話も、巻十から削除された後、連接したままで巻四（第三一・三二話）に再収録されている。

ところで、さしかえられた三話の標題が今日に残されているのは、ひとえに編者の不注意による。本来ならば本文がさしかえられたとき、標題もとうぜん訂正されるべきであった。それがうかつにも、未修正のまま放置されてしまったのだ。

第一話では本文標題、第二九・三十話では目録標題に編者が不用意に残した企画段階での標題は、しかし一方において、それらの本文が他の巻で生かされていることのたしかな証言となった。

わずか三話とはいえ、企画の段階で採用を予定していたはなしと、それを排除してあらたに設定したはなしとの双方が確認できるのは、他に例をみない希有な現象である。それだけにまた、留意すべき現象でもあろう。じじつ、新旧ふたつのはなしをつきあわせることによって、いずれか一方だけでは不鮮明であった巻十の輪郭が、浮かびあがってくるようにおもわれる。

2

巻十の第二九・三十話に収めるべく当初企画されていたのは、いまいうように

国王服乳成瞋擬殺医師語

国王前阿竭陀薬来語

であった。これが巻四に、第三一・三二話として再収録されたときの標題は、つぎのごとく表現の一部が変えられている。

天竺国王服乳成瞋擬殺耆婆語
震旦国王前阿竭陀薬来語

〈医師〉が〈耆婆〉に改められていることについていえば、このはなしに登場する医師が耆婆であったとの文言は本文中になく、したがって巻四の標題は本文と齟齬している。これは医師イコール耆婆との誤解によるものか、あるいは天竺話としての側面を強調せんがためになされた意図的な改変かの、いずれかであろう。後者だとすれば、はじめ震旦部に配そうとしていたことの、負い目の表出だとの解釈もなりたちそうである。

〈天竺〉および〈震旦〉の付加は、前後のはなしが本文冒頭に示されている国名を標題にかかげるという方法をとっているのに、歩調をあわせた措置のようだ。

それにしても、いわゆる耆婆譚を、天竺種であるにもかかわらず震旦部に収めようとしたのと同じあやまりを、ここでもまた犯している。阿竭陀薬譚は、本来は天竺種であったとみるのが自然なようであるが、少なくとも本文の冒頭には、震旦の国王にかかわるはなしだと明示してあり、震旦種との素姓ははっきりしている。それを、しかも〈震旦〉と標榜しながら天竺部に収めているのである。

この巻四第三二話のばあいとは逆に、震旦部に天竺種のはなしが収められている例に、巻九第一三話の

□人以父銭買取亀放河語

がある。このはなしには、本文中にも主人公の名はない。こうしたばあい『今昔物語集』は、しばしば「隋代人」・「冀州人」のように、主人公の生きた時代や場の呼称をもって、固有名詞の欠をおぎなっている。この方法にしたがえば、□部分はとうぜん、本文冒頭にかかげられている「天竺人」となるはずであった。しかしいかにも、震旦部の主人公を提示するのに「天竺人」は唐突であり、不自然である。そこで標題は空格のままにしておいたのであった。本文の相当個所もついでに抹消しておけば、頭かくして尻かくさずのそしりはまぬかれることになったろうが、それをしなかったのは不注意によるものなのか、あるいは、はなしの根幹にかかわる部分には手を加えるべきではないとの判断によるものなのか。ともあれ編者には標題の主格を空格のまま残すことによって、中途はんぱながら、不自然さを回避するようにつとめている。

巻四第三二話にこのような配慮がされていないのは、編者が二話一類の説話配列にこだわり、前後のはなしとの形式的な調和をはかることに腐心するあまりに、全体を展望する冷静さを失なっていたためでもあろうか。もしそうだとすれば、震旦部から天竺部に急ぎ移し変えざるをえなかった困惑の後遺症ということに、これはなりそうである。

3

ところで、当初採用を予定していたいわゆる耆婆譚と阿竭陀薬譚とを巻四に移籍した後で、それらにとってかわるべきものとして用意されたのは、くりかえすことになるけれども、

震旦国王愚斬玉造手語
漢武帝蘇武遺胡塞語

の二話であった。『俊頼髄脳』からみちびき出されたこの二話には、

震旦部に収めることの不都合はない。

しかしそれにしても、どのような点が評価されて、卞和譚と蘇武譚とは第二九・三十話に起用されたのだろうか。そしてそれらは、代替としての責をじゅうぶんに果しているのだろうか。

卞和譚と蘇武譚とがあらたに起用された理由は、第二九・三十話を形成する新旧二組のユニットをつきあわせることによってえられるはずである。

新旧二組のユニットを眺めやるとき、まず目につく特徴的な傾向は、旧ユニットの、医薬を材とした題材上の共通点であろう。巻十から巻四へ移項されるについても連接されたままであったことに示されているように、結節のきずなは固い。それだけに印象も強烈であるし、ややもすれば、その強烈さに目を奪われがちである。

だが、けっしてその強烈さに惑わされてはなるまい。旧ユニットの存在理由は、たとえその時点では題材の共通性にあったとしても、新ユニットの導入に際しては、それはほとんど無視されている。新ユニットには、旧ユニットの個性的な題材の共通性に対応する条件が付与されていないことによって、それはたしかめえよう。

そもそも二話を補塡する必要が生じたとき、とるべき対策の第一は、欠落の生じたのと同じ位置で、その欠をおぎないうる資料の探索であろう。このばあい、収めるべきはなしの性格がすでに方向づけられているだけに、探索は容易ではなかったはずである。努力したとて、かならずしも満足のいく資料がえられるとはかぎらない。多少の不満には目をつぶり、妥協しなければならない局面も、おそらくあったことだろう。

不満はあっても、探索の結果、欠落部分をその位置でうめられる資料がさぐりあてられたばあいはまだよい。巻十はもともと、乏しい資料をやりくりして構成した巻であった。そこへさらに条件をしぼっての再探索であるから、しかるべき資料を求めえないばあいもあったに違いない。さりとて、欠落部分をそのままにしておくわけにはいかない。となれば次善の策として、他の部分に挿入可能なはなしを見付け出し、順操りに横すべりさせる方法によって調整するほかない。第一三・一四話のばあいは、この方法によって補塡された可能性がきわめて強いようにおもわれる。

さて、第二九・三十話のばあいは他に類をおよぼすことなく、その位置で補塡されている。したがって　和譚・蘇武譚は、曲りなりにもなっとくのいくはなしであったということになろう。新ユニットには、旧ユニットにみられる題材の共通性に対応するような格別の特色は見出しにくいけれど、それはそれとして、代替の任にたえうるとの判断を編者がもっていたことを、この事実は示しているにほかなるまい。

さしかえられた新旧ふたつのユニットのあいだには、発想の転換が意図的におこなわれていないかぎり、通じあう部分がなければなるまい。逆にいえば、共通する世界があるからこそ、卞和譚・蘇武譚には、耆婆譚・阿竭陀薬譚の代替の座があたえられているはずなのだ。

新旧二組のユニットで、共通するものとはいったいなになのか。

一にも二にも、それは国王に関するはなしだという点につきる。すなわち耆婆譚は、蛇の子として生まれた国王の眠り病を、乳を服

用させることによって治したはなしであり、阿竭陀薬譚は、治療にことよせて皇子の暗殺をはかった大臣が、薬の名をいつわって阿竭陀薬と答えたため、毒薬変じて良薬となり、病が癒えたはなしであり、十和譚は、二代の国王に左右の手を斬られながらも玉を献上し続けた玉造の真意が、三代目の国王にやっと認められたはなしであり、そして蘇武譚は、胡塞に行ったまま消息を絶った衛律の救出を国王に命じられた蘇武が、謀をもって相手の偽りを破り、救出に成功したはなしである。

この四話が国王に関するはなしであること、とりわけ新ユニットにその意識が作用していることは、つぎの点からもいいうるだろう。他の三話には、主役であるなしにかかわらず国王が直接登場するのに対し、蘇武譚には国王は、間接的にしか顔を出していない。にもかかわらずというべきか、それゆえにというべきか、蘇武譚の標題には「漢武帝」と、王名が明示されている。時代が「漢ノ武帝ノ代」だとあるから、胡塞行きを命じた王が武帝であることはたしかだが、はなしの主人公はあくまでも蘇武である。「漢武帝蘇武遣胡塞語」との標題は、内容とまったくかけはなれているというわけではないけれど、さりとて適正な標題ともいいがたい。主格を〈蘇武〉とせず、あえて〈漢武帝〉とした背後には、これが国王に関するはなしでなくてはならないとの意識が、強く作用していたものとみられるのである。

国王が直接顔を出すはなしを求めたものの、期待どおりの資料がえられない。やむなく蘇武譚を第三十話にすえ、標題に〈武帝〉をかかげることで妥協した。蘇武譚の起用のいきさつは、このようなしだいではなかったか。いずれにしても、国王へのこだわりなしに、蘇武譚の標題策定の事情は説明しにくい。

4

巻十には、国王に関するはなしが二群ある。ひとつはいうまでもなく、第一話「秦始皇在感楊宮政世語」から第八話「震旦呉招孝見流詩恋其主語」までの八話であり、いまひとつは、第二八話「国王行江鈎魚見大魚怖返語」から第三五話「国王造百丈石卒堵婆擬殺工語」までの八話である。

所収するところわずか四十話の巻十に、国王に関するはなしが一六話もあることについては、あるいは、「国史」と銘打たれた巻の性格から説明することもできるかもしれない。

だが、なぜ二群に分かたれているのか。これは「国史」の視点からでは説明できないだろう。

四十話中の一六話は、一大勢力である。しかもこれらは、ばらばらに存在するのではなく、はっきりと二群を形成している。巻十の構成が、国王譚を顧慮することなし企画されたとは、とうてい考えられないだろう。さらにいえば、二群の分散は、編成上の要請からきているとみるのが相当なようにおもわれる。

しかしこの点にふれるまえに、ふたつの群の特色をおさえておかなければならい。

秦の始皇、漢の高祖・武帝、唐の玄宗と続く第一群の配列が、歴史の展開をふまえたものであることは疑いがない。けれども、第五話の王昭君譚以下の女性がらみのはなしのなかには、個人的な側面

の強いものもふくまれていて、この一群をすべて「国史」に結びつけて解釈することには、いささか無理があろう。加えるに第二群のなかにも、たとえば第三一話「二国互挑合戦語」や、第三三話「立生瞽国王止此平国語」のように、「国史」そのものというべきはなしがふくまれている。

つまり国王に関するふたつの群には、歴史直結話と非直結話といった視点からの分類はなされていないのである。結論的にいえば、このふたつの群は、ひとえに、国王の名のありなしの別によっているのだ。

第一群には始皇をはじめとする国王の名がかかげられており、それが個々のはなしの興味を盛りたてる効果をもたらしている。歴史の展開をふまえた配列にするために、国王の名の具体的に記されているはなしがここには不可欠であった。それに対して第二群には、もっぱら王名未詳譚があつめられている。ふたつの群は、分かたれるべくして分かたれているのだ。けっして偶然の所産ではありえない。

もっとも、それぞれの群には一話ずつ例外がある。第八話「震旦呉招孝見流詩恋其主語」と、第二九話「漢武帝蘇武遣胡塞語」とである。前者は有名の国王に関するはなしを収めた第一群に属していながら、国王の名が示されていない。逆に後者は、王名未詳譚を収めた第二群に属していながら、「漢武帝」とその名が明示されている。

この二話はすでにふれたように、いずれも編集作業がすすむなかで、後から加えられたものであった。いわば一種の緊急避難の措置として挿入されたものであった。多少の瑕疵に気付いていたとしても目をつぶるほかない、やむをえぬ選択であったのだ。

後から加えられたことのあきらかなこの二話が、いずれも欠格事由をそなえていることは、国王に関する二群のはなしが、名のありなしの別によっているとみることの妨げにならないばかりか、むしろ逆に、そして積極的に、企画の段階で意識されていたことを裏付けるであろう。

5

巻十では、国王に関する巻頭の八話に続いて、第九話から第一五話までは孔子等に関する聖賢譚、さらに第一六話から第二十話までは養由等に関する武将譚が収められている。つまり、四十話のうちの前半の二十話には、国王・聖賢・武将にかかわるはなしが、その順に数話ずつの群を形成して配されているのである。題材や内容においてではなく、主人公という共通項でくくられているはなしが相当数ふくまれていることは、巻十にみられる特徴的な傾向といってよいだろう。そしてこの国王・聖賢・武将は、いずれも国を動かした人びとであり、彼らに関するはなしを巻頭にすえることは、「国史」の巻にふさわしい構成のようにみえる。

けれども、じつは、ここにひとつのもんだいがある。巻十の前半の構造をこのようにとらえたばあい、後半部については説明がつけにくいのである。前半の整備状況にくらべて、あまりにも落差がおおきいからである。巻十がたとえ乏しい資料をやりくりして編成された巻であるにせよ、前半と後半とのありように極端な差があるの

は、いかにも不自然であろう。

これはわたし自身の反省でもあるのだが、前半の整然とした配列に眩惑されてはなるまい。前半の構成に目を奪われると、後半に配されている王名未詳譚の一群が見えてこなくなる。

いまいうように、主人公という共通項で数話をくくるのは巻十の特徴である。王名未詳譚とて例外ではないだろう。王名未詳譚の一群が、前半の国王・聖賢・武将譚の各群の延長線上にあるものだとすれば、後半の構成にもとうぜん前半と同じ発想が生かされているとみなければならないわけで、巻十の見取り図も見なおしが迫られることになる。

おもうに、王名未詳譚の一群は、国王にかかわるはなしであるとの理由で巻頭の国王譚のつぎに置かれていても不思議はないのに、分離して配されているそのわけは、これらがいずれも、弱者・敗者、あるいは劣者の逆転を内容とし、彼らへの再評価を志向するはなしであることに由来しているのではないか。ちなみに、王名未詳譚の一群に続く巻末の五話にも、第四十話の「利徳明徳興酒常行会語」を除けば、同一趣向を読みとることができそうである。

かりにこれらを一括して教訓譚と呼ぶとすれば、その前に位置する一群、すなわち、第一六話「養由天現十日時射落九日語」から第二七話「三人兄弟売家見荊枯返直返住語」までの、武将譚を頭にいただく一二話は、賞讃譚ということができるだろう。対象は〈武〉であったり〈孝〉であったり、あるいは〈学〉であったりさまざまであるが、そこでは主人公の生きざまが肯定され、讃美されている。

いわんとするところは、もはやあきらかであろう。巻十の構成は、三部よりなっているのだ。第一部は、巻十をもっぱら「国史」の巻たらしめるべく用意された第一話から第一五話までであり、第二部は右にいう賞讃譚、そして第三部は教訓譚の一群である。各部はさらに二分され、それぞれの前半部には、国王、武将、国王に関するはなしが収められている。巻十の「国史」は、この措置によってはじめて、巻規模の構想となることをえたといってよい。

巻十の巻頭に秦の始皇以下の国王譚が必要であったのとほぼ同じ重みで、第二八話「国王行江鈎魚見大魚怖返語」から第三五話「国王造百丈石卒堵婆擬殺工語」までの王名未詳譚は、なくてはならないはなしであった。王名未詳譚は他のところにではなく、現在の位置に置かれることによって機能するように、巻十は設計されているのだ。

教訓は批判と表裏の関係にある。ときとして否定的な言辞は避けられない。とすれば、個有名詞はない方が無難だろう。教訓譚の国王名は、『今昔物語集』以前の段階で、すでに消去されていたもののようである。

6

三部構成二層方式とでも呼ぶべき巻十の構造は、しかし『今昔物語集』にあって、けっして特異な方法ではなかった。というより、それはすぐれて『今昔物語集』的な思考形態の所産であった。天竺・震旦・本朝の三部よりなる大組み。各部の内部がさらに仏法、非仏法の二種に分かたれる構成。これは『今昔物語集』を『今昔物語

集』たらしめる基本構造であった。

はなしの内容における歴史・賞讃・教訓の区分もまた、すでに指摘されているように、『今昔物語集』の基軸をなす組織原則であった。(注2)

不注意によって生じたとみるほかない瑕疵など、整備不十分な点はたしかに散見する。しかし巻十は、けっして無原則な員数あわせをしたり、雑話を集めた、単なる付けたりの巻といった性質のものでないことを、こうした事情はさし示していよう。

従来かえりみられることの少なかった巻十であるが、編集過程でほどこされた手なおしの痕跡は、その構造が練られ、周到に用意されたものであることを、また、『今昔物語集』の、少なくとも震旦部に対する編者の意気込みの、なみなみならぬものであったことを、かいまみせているようにおもわれる。

注1　「今昔物語集」の編集過程―目録標題と本文標題とのあいだ―

注2　『今昔物語集成立考』（国東文麿、昭37・5）